

* 市の花「チューリップ」



富山県でのチューリップ栽培は、大正 7 年(1918 年)に東砺波郡庄下村(現在の砺波市)から始まりました。砺波地方そして富山県には、チューリップの生育に適した気温、日照時間、肥沃な土地、豊富で良質な水などの自然の恵みがあり、チューリップ栽培は水田裏作の有望な特産物として県下全域に波及していきました。かつては、海外へも輸出され、好評を博していましたが、近年は、輸入自由化により、安価なオランダ産輸入球根が急増し球根販売は厳しい状況にありますが、生産者・富山県花卉球根農業協同組合・県などの関係機関が協力して、オリジナル品種開発や低コスト栽培管理技術の普及などに取り組んでいます。また、砺波市では、(財)砺波市農業公社を設立し、生産者に対する球根栽培のための圃場の確保や機械化・省力化を支援しています。

砺波市ではチューリップ球根が、日本一の生産量を誇り、市の代表的特産物であることから、ゴールデンウィーク期間中にチューリップフェア(平成 17 年で 54 回目)を開催し、毎年 30 万人以上の来場者を迎えています。これにより、全国的にも「砺波のチューリップ」、「チューリップの砺波」として広く知られており、チューリップは「砺波」のシンボルとなっています。また、「チューリップ四季彩館」では、チューリップフェア期間以外にも四季を通してチューリップを楽しめたり、チューリップの歴史や文化を紹介しています。

(参考)

○なぜ砺波地方でチューリップの栽培が盛んになったのか。

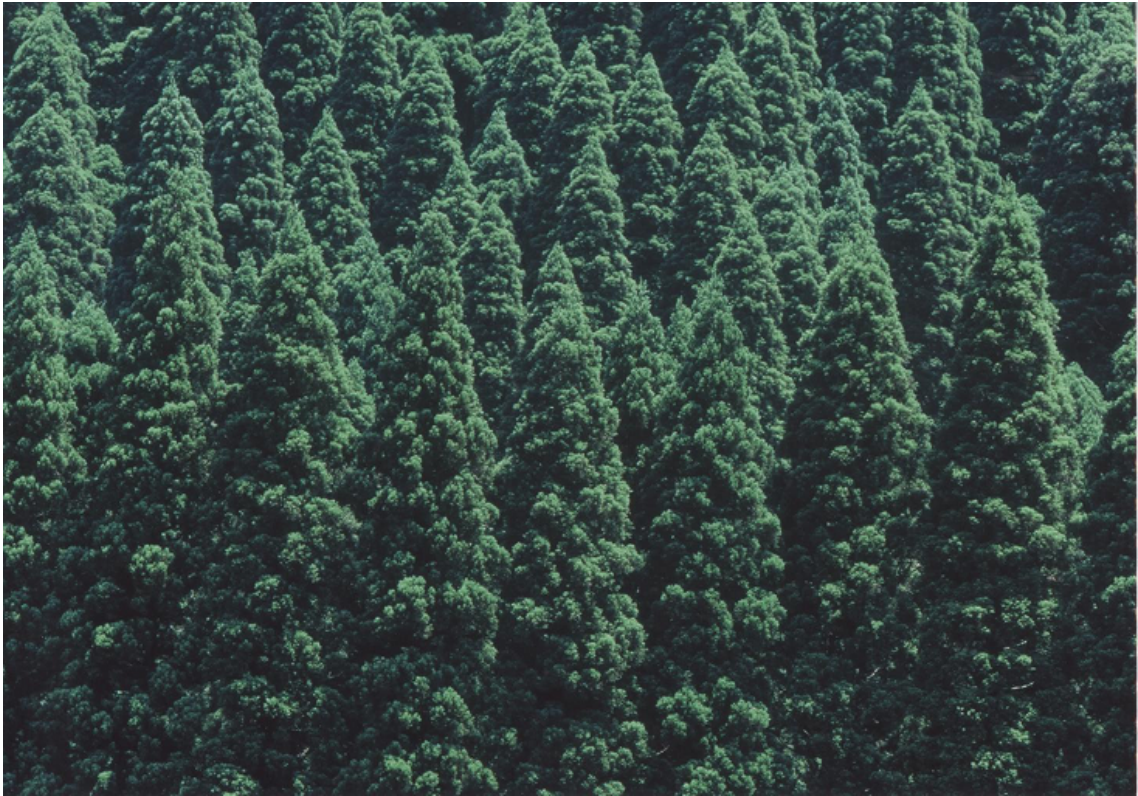
砺波地方はチューリップの球根生産に適した自然条件を備えています。その自然条件とは、

積雪の多い砺波地方では、秋に植えられた球根は、冬の間、雪の布団の下で適当な温度と湿度のもとで、保護されています。雪の下は案外暖かく、0℃前後で推移するといわれています。また、暖地では2月頃からチューリップの萌芽の頃より発生するアブラムシがウイルスを媒介して、チューリップにとって致命傷となるモザイク病を発生しますが、雪が降ることによってアブラムシの発生が抑えられ、モザイク病が抑えられます。

花が咲いた後、4月から6月にかけて地下部の球根が肥大します。この時期、砺波地方はお天気がよく、日本一と言っていいほど日照時間が長いので球根がよく太ります。

チューリップは大水のみといわれるほど成育中に根から水を吸い上げます。砺波地方では、豊富な雪解け水により、育つのに必要な水を十分与えることができます。

* 市の木「スギ」



砺波平野の景観の特徴は、「散居村」です。「散居村」は、緑豊かな屋敷林に囲まれた家々が、平野一面に碁石を散りばめたように点在する景観です。

農家を取り巻く屋敷林は「カイニヨ」と呼ばれています。「カイニヨ」は、厳しい冬の風雪と夏の暑さを防ぐためにも欠くことのできないものでした。

「カイニヨ」を構成する樹種やその配置には、木とともに生活した先人の知恵とその心の豊かさを潜めた生活文化の一端が見られ、その中心樹種となっているのが、スギです。スギは防風効果もあり、落ち葉や小枝は燃料となり、また、その材は建築用材ともなります。「高（土地）を売ってもカイニヨは売るな」ともいわれ、先祖代々大切に守り育てられました。

昔は、「カイニヨ」のある家では子供たちも庭掃除や落ち葉の始末など、父母、祖父母との共同作業を通して家族の絆が一層強められました。

また、「カイニヨ」を構成する樹種は、いろいろな虫の生育環境に適し、大きな森、小さな森と野鳥や小動物に多様な環境を提供しています。

最近では、落ち葉の片付けのわずらわしさや花粉症の原因がスギ花粉等とマイナス面ばかりが強調されますが、「カイニヨ」（特にスギ）は温暖化の原因といわれる二酸化炭素の吸収機能が自然環境保護に役立つほか、四季の移ろいを野鳥、小動物とのふれあいを通して体感できるなど、情操教育の点からも評価することができます。

また、森林に入ると、ほのかで、すがすがしい気分になることがあります。これは、木や草などの植物から特有の香りが発散されることによるものです。この香りの原因となる物質は「フィトンチッド」で、殺菌作用があると言われています。これが、人に

もよい効果をもたらすことになり、「カイニヨ」のある家では、日常生活の中で森林浴をしていることになります。

* 市の花木「エドヒガンザクラ」



「エドヒガンザクラ（江戸彼岸桜）」は、本州、四国、九州など西日本から中国大陆の一部に自生する野生種です。春になると庄川の向い山（砺波嵐山）の山腹に 200 本以上の桜が咲きます。雪の多い北陸の山中に、このように多く自生しているのは、大変珍しいものです。

県内で「エドヒガンザクラ（江戸彼岸桜）」が自生するのは庄川と神通川流域だけで、特徴的だといえます。

「ソメイヨシノ」(交雑種)は種をつけないので、接ぎ木や挿し木などで増やしますが、「エドヒガンザクラ（江戸彼岸桜）」は実をつけて野鳥を養います。庄川は、上流の蛭ヶ野高原の分水嶺で長良川につながります。南北を移動する野鳥は、南と北を結ぶ川沿いに移動することが多く、たくさん実った「エドヒガンザクラ（江戸彼岸桜）」の実を食べた鳥たちが、その種をフンと一緒に山の中へ落としていくので、長年の間に、太平洋側の桜が川沿いに北上して、自生地を形作ったとされています。

「エドヒガンザクラ（江戸彼岸桜）」は、植物と野鳥の関連から見ても、自然環境の豊かなサイクルの営みを育んでいるといえ、庄川の流れとともに発展した砺波市としてふさわしいといえます。

また、「エドヒガンザクラ（江戸彼岸桜）」の木の寿命は 300 年から 400 年といわれるほど生命力に富み、病害虫にも強く、全国に樹齢 1000 年といった天然記念物に指定されている有名な古木が多くあり、砺波嵐山には幹周り 305cm、高さ 18m、樹齢約 300 年の巨木があります。

また、砺波嵐山桜保存会の皆さんが、樹木に標識を付け、育成管理に努めておられます。

*市の鳥「ヒヨドリ」



ヒヨドリは、市内全域に生息しており、四季を通じて見られる身近な野鳥と言え、木々が茂っている環境なら何処にでもいる鳥です。砺波地方では、一般的に子育てのシーズンは低山帯で暮らし、秋から春にかけては平野部にいることが多いので、屋敷林でもよく見かけることが出来ます。

大きさは中型（ハトより少し小さめ）で全体の色はシルバークレー、ピーピーーとかパイ~ヨパイ~ヨと甲高い声で鳴きます。

甘いものを好むので椿や桜の花の蜜を吸いに来ますし、木や草の実も良く食べます。種子の運び屋さんとして、森づくりに一役かっています。